

今週のメニュー

[トピックス](#)

京都大学での樹脂内窓の温熱環境改善の検証スタート

[随想](#)

ルワンダ旅行記(1) - ジェノサイド(大虐殺) -

(社)日本化学工業協会 若林 康夫

[編集後記](#)

トピックス

京都大学での樹脂内窓の温熱環境改善の検証スタート

東京大学の総長室フロアーに樹脂内窓を設置して行った効果検証に続き、京都大学でも、1年間を通しての樹脂内窓の温熱環境改善の実証調査をトステム(株)と共同で行なうこととなりました。

本研究は、京都大学大学院工学研究科 建築学専攻の銚井教授が中心になって行っていただくことになりました。先生は、1997年には、「外界気象の確率的変動を考慮した建築熱環境設計に関する研究」で日本建築学会賞(論文)を受賞されており、現在は建築材料や温熱環境などについて研究され、日本建築学会や空気調和・衛生工学会、IBEC((財)建築環境・省エネルギー機構)などの委員もされています。また、最近では高松塚古墳の壁画の保存委員もされ建築環境・設備では日本を代表する先生です。

そんな先生の強い力添えの下、今回は、IV地域(住宅の次世代省エネルギー基準の地域区分)でも関西地区と位置づけ、特に寒暖の差の大きな京都で検証を行なうことにしました。

今回の検証の着目点は、IV地域の次世代省エネ基準を満たす窓(ペアガラス)の内側に更に、樹脂製内窓を、また単板ガラスの室内側にIV地域の次世代省エネ基準以上の樹脂製内窓(LOW-Eガラス)を付け、省エネ効果やCO2削減効果を見ることで、これからの窓の在り方に少しではありますが一石を投じられるのではないかと考えています。

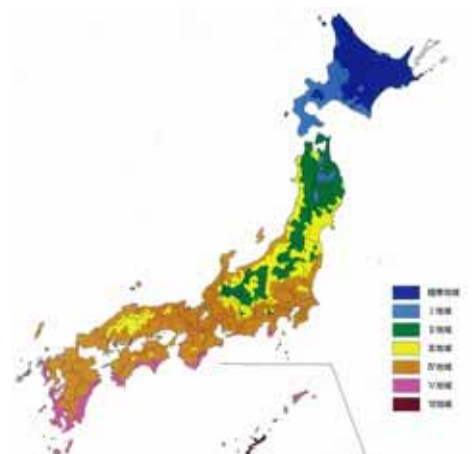
検証概要は、京都大学桂キャンパスのC2クラスター棟の2室において、夏期および冬期の内窓取付け前後の窓面温度および室内空気温度・壁面表面温度の計測、工



京都大学
(右手奥がC2クラスター棟)



検証対象窓のひとつ
上下の窓(ペアガラス)共に内窓を設置



次世代省エネルギー基準の地域区分
(出典：(財)建築環境・省エネルギー機構)

エアコンによる供給熱量および電力消費量の計測を行ない計測結果に基づく室内温熱環境効果、および省エネ効果を検証することを目的としています。また、在室職員、学生への聞き取り調査等も行ない温熱環境等の改善効果の検証も行なって、来年度の日本建築学会への発表を目指します。(了)

随想

ルワンダ旅行記(1) - ジェノサイド(大虐殺) -

(社)日本化学工業協会 若林 康夫

「ルワンダ(正式名称:ルワンダ共和国)」に到着しました。

これまで旅行記をお送りした国は「ウガンダ共和国」。国名は似ていますが、全く異なる国です。「千の丘の国」と呼ばれるだけに首都キガリでも見渡す限り丘だらけの美しい国です。

一般の人が「ルワンダ」と聞いて思い浮かべるのは1994年4月から6月まで行われた大虐殺でしょう。

ベルギーの植民地時代の政策で、ルワンダでは少数民族であるツチ族中心の支配が続いていましたが、1962年の独立以後は大勢派であるフツ族との内戦が繰り返されていました。

1994年4月、フツ族のハビヤリマナ大統領が乗った飛行機が何者かによって攻撃され墜落し死亡(攻撃した犯人はいまだに不明)。これをきっかけに、政治的にも抑圧され不満が高まっていたフツ族によるツチ族とフツ族の親ツチ族派の大虐殺が始まります。3カ月に亘る大虐殺で80~100万人もの人が殺されたとされていますが、正確な被害者数は把握されていません。

この大虐殺で、ルワンダの人口は1995年には170万人にまで低下するという、実に国民の3分の1以上が殺される事件でした。

この大虐殺では、旧宗主国であるベルギーとフランスがそれぞれの民族を支援し対立していたことや、国連軍の介入失敗など数多くの国際的な問題を残すこととなりました。

また、昨日まではいくつかの対立はあったものの隣同士で殺戮を始めるという異常な事態(集団ヒステリー)を招いた原因としてフツ族系ラジオ局の放送が大きな影響を与えたことも指摘されています。このラジオ局は既に廃局となり、現在はありません。

この虐殺に加わった加害者の裁判は現在でも国際戦犯法廷で続けられています。



[クリックで拡大](#)



大虐殺により破壊、放棄された村。
(このような村が各地にあり、今でも被害者の遺体が発見されています。)

この大虐殺については、テレビのドキュメンタリーなどでも数多く取り上げられるとともに、ホテルの支配人が 1200 人以上の人たちをホテルに匿った実話をもとにした「ホテル・ルワンダ」という映画も作成されています。



現在の Hotel des Mille Collines

映画「ホテル・ルワンダ」の舞台となり、事件当時は、今は亡きサベナベルギー航空所有であった Hotel des Mille Collines はオーナーが変わった後も首都キガリの高級ホテルとして同じ名前で営業を続けています。

映画自体は南アフリカで撮影されたのですが、実際の Hotel des Mille Collines は思ったより小さなホテルで、この敷地内によく 1200 人もの人を収容できたと驚きました。

いまでは街中を普通に歩いている限りはそのような大虐殺が行われた痕跡を見つけることはできませんが、事件から 15 年。中学生以下の人を除き、ほとんどの人が実際にその大虐殺を体験した人たちです。

彼らに尋ねても大虐殺については一切語ろうとしません。しかし、心に大きな傷を負っており、トラウマとなった記憶とどのように向き合っていくのかが大きな課題です。

普段は非常に物静かなルワンダの人たちですが、心の底には大きな暗闇があるようです。

さて、暗い話が続いたので、話題を変えてルワンダの統計を見てみましょう。国の広さは 26,338 平方キロメートル。長野県を 2 つ合わせた程度の広さです。人口は事件当時と比べるとかなり増えて 10,473,282 人。平均寿命は 50.52 歳です。大虐殺の原因ともなった民族構成は

Hutu	84%
Tutsi	15%
Twa	1%

となっています。ちなみに、Twa は別名ピグミーとも呼ばれ、日本ではこちらの呼びの方が知られているかもしれません。

大虐殺前からフツ族とツチ族は部族を超えた結婚により混血が進んでおり、大虐殺までは身分証明書にも所属する部族名が記載されていましたが、現在ではそのような記載はありません。

上記の民族構成も大まかな分類によるものです。ただ、一部の人たちはフツ族とツチ族のどちらか一目でわかる身体的な特徴を有しています。

言語は Kinyarwanda と呼ばれる言語が正式言語です。ベルギーの植民地だったこともありフランス語もよく通じます。英語も比較的通じますが、フランス語ほどではありません。

宗教はベルギーの植民地だったということもありキリスト教（カソリックとプロテスタントを含む）が 82.5% を占めます。

さて、このようなルワンダですがどんな出会いがあるでしょう。（つづく）

前回のウガンダ旅行記(4) - パイナップルサンドイッチ - は、下記からご覧頂けます。

http://www.vec.gr.jp/mag/277/mag_277.pdf

編集後記

今、塩ビの素材に興味を持った若手のファッションデザイナーとのコラボレーションを進めています。きっかけは当協会のお問い合わせで塩ビ素材について知りたいとのメールから始まりました。透明感があって、色彩が豊かで柔らかく、いろいろな形にできることが面白いと感じたようです。素材の提供や縫製・加工を手伝って頂ける方も見付かり、雑貨小物の製作に取り掛かっています。人の縁は分からないものですが、出会いを大切にする心があれば、世界が広がっていくと実感しています。9月には作品が出来上がる予定で、今からワクワクしています。

さて、暑さ厳しい日が続きますが、体調管理に気をつけて、この夏を乗り切ってください。メールマガジンも一息ついて、来週は夏休みを頂きます。(円行)

関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL info@vec.gr.jp
